

知的障害児を抱える家庭の 住まいの問題とその改善策

京都府立大学大学院 西尾 幸一郎

深刻な住まいの問題

厚生労働省の調べによると、全国に知的障害児は9万6300人おり、その9割弱が在宅で生活しているそうです。近年、知的障害児とその家族の在宅生活を支援するサピス（学童保育・短期入所など）は少しずつ充実してきました。しかし、本人と家庭が、安心して在宅で生活していくためには、まだ、様々な問題が残されているというのが現状です。

たとえばマンションに住むある家庭では、子どもが家の中でピョンピョンと飛び跳ねたりするので、その騒音のために階下の住民から苦情や嫌がらせが頻繁にあったそうです。そこで両親は床にじゅうたんを5重に敷いて、なんとか騒音を少なくしようとして工夫しました。しかし、苦情

どがあります。

以上のように知的障害児を抱える家庭の中には、日常生活で様々な問題を抱えているところが少なくありません。

知的障害児の場合は、保護者の言い聞かせなどで本人の行動を抑制させることが難しいケースも多く、問題が長期化・深刻化する傾向にあります。

そのような中で、家族が自らの体験をもとに、次のような住まいや住み方の工夫（ハードの改善策）をおこなうことで、日常生活の困難が少なからず改善した事例もみられます。

改善事例の紹介

二重窓に変更したケース

Y君（当時18歳、男性、療育手帳A）の家庭（4人家族、持ち家一戸建て）で困っておられたのは、Y君の大声や奇声による騒音の問題です。

Y君は、音量の調整がうまくできず、家族を呼ぶときなどに、夜中で



写真1：二重窓

も「おーい、おーい」と大声を出します。また、母親によると、学卒後、Y君はエネルギーの発散のために奇声を発することが多くなってきたとのことでした。Y君の大声や奇声は、家の外からも聞こえるため、両親は近所迷惑になっているのではないかと心配されていました。

そこで、この家庭では、Y君の主な生活範囲である自宅の一階部分の窓をすべて二重窓にされました（写真1）。その結果、Y君が大声や奇声を上げても家の外からは聞こえなくなりました。

飛び出し防止の柵を設けたケース
自宅一階にあるR君（当時8歳、

男性、療育手帳A)の子ども部屋は、大きな道路に面しています。R君は多動のため、両親が目を離れた際に子ども部屋から外に飛び出して事故にあってしまうのではないかと、家族(4人家族、持ち家一戸建て)は心配していました。そこで、両親は、R君の子ども部屋の開口部に柵格子を設け(図1)、R君が両親の知らないうちに家の外に出ていってしまうようなことがないようにされたそうです。

腰壁を取り付けたケース

O君(当時15歳、男性、療育手帳B)の家庭(4人家族)では、O君がイライラしたときに壁を叩いたり、蹴ったりするので、住宅の壁面

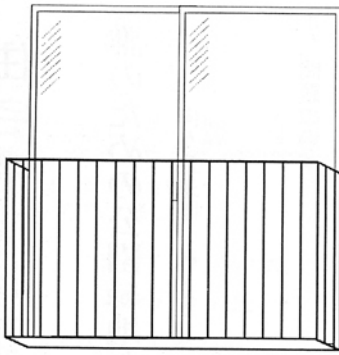


図1: 柵格子

に穴がたくさん空いてしまっており、困っておられたそうです。

そこで、家族は自宅を新築する際、他人の目にふれやすいリビングルームの壁には穴が空きにくくするため腰壁を取り付けることにしました(写真2)。本当は、家中の壁に腰壁を取り付けたかったそうですが、予算の都合で断念されたそうです。

新築から3年が経過した現在、腰壁を取り付けた箇所は空いていません。ただし、リビングルーム以外の壁面にはいくつか穴が空いてしまっています。

トイレの鍵を取り替えたケース

M君(現在12歳、男性、療育手帳

A)が小学校低学年の頃、トイレの中から鍵をかけたところ、鍵の開け方がわからず、中に閉じこめられて困ったことがあったそうです。当時、トイレのドアノブに付いていた鍵は、外から開けられないタイプのものでした。

そこで、家族(4人家族、持ち家一戸建て)は、また、M君がトイレの中に閉じこめられるようなことがあつては困るので、いざという時はトイレの外からも十円玉などで鍵が開けられるタイプのドアノブに付け替えました。

まとめ

これまで住宅関係者の間では、知的障害児を抱える家庭の住まいの問題とその改善策についてはほとんど取り上げられてきませんでした。

実際には、ここで紹介した事例の他にも様々な住まいや住み方の工夫が、家族らによっておこなわれており、それによって日常生活の困難が少な

らず改善されています。

一方、市営住宅に住む家族で防音対策のための住宅改造をしようとしたが、市営住宅のため住宅改造に制約がかかり、改善を断念したというケースもあります。このようなケースは、家族の自助努力だけでは改善することは難しく、様々な分野の専門家による支援が不可欠であると思われまます。

今後の課題としては、住宅・福祉・療育などの専門家が連携を組んで、本人の自立や発達の促進という視点も考慮に入れながら、その時々状況に合わせて住環境を改善するための支援に取り組んでいくこと。そして、個々の家族が抱える多種多様な問題に対応できるだけの豊富な改善策を整理していくこと、などが必要であると考えます。

※左記のホームページにて、本稿で取り上げられなかった様々な改善事例を紹介しています。もし、よろしければご覧ください。「知的障害児を抱える家庭の住まいや住み方の工夫」

<http://www.kpu.ac.jp/ninngen/>

mizuno/kufu/

写真2: 腰壁

